1　奈良の鬼瓦

岩戸　晶子

A　はじめに

奈良においては、78 遺跡で鬼瓦の出土が確認できた。７世紀代の寺院出土の鬼瓦の多くが集中する点、また各地で出土例が増加する８世紀代においても、特に平城宮と寺院での出土点数は群を抜いている。平安時代以降の鬼瓦の例は前代に比べると資料数はかなり限られるものの、飛鳥時代・奈良時代においてはその生産数、作笵数ともに突出しており、古代日本の鬼瓦生産をけん引する役割を果たしていたと考えられる。本論では、時代ごと、文様系統ごとに鬼瓦の様相と変化、その背景について概観する。

型式分類については毛利光俊彦の「日本古代の鬼面文鬼瓦」（毛利光 1980）に従う。また鬼瓦の各部名称については岩戸（2001）、鬼瓦の抉りや下端の形状の分類は岩戸（2005）による。

B　飛鳥時代の鬼瓦

ⅰ　寺院の様相

飛鳥寺では鬼瓦の出土が知られておらず、最古の鬼瓦としては、７世紀初頭の法隆寺若草伽藍（斑鳩寺）出土複数蓮華文鬼瓦（第１図）が著名である。粘土板にコンパスと定規で幾何学的な蓮華文を下描きし、手彫りする。固定装置は掘り込み把手。複数蓮華文、文様表出方法は、扶蘇山城出土例など百済の鬼瓦に共通し、百済の工人が製作に深く関わったことが窺える。しかし、複数蓮華文鬼瓦は京都の樫原廃寺やその周辺寺院等に例があるが手彫りの百済スタイルは他に例を見ず、その技術は受け継がれなかったようだ。代わって出現するのが、奥山廃寺例の奥山Ⅰ式をはじめ豊浦寺（平吉遺跡）出土例（第２・３図）などの鬼板とも呼ばれる板状の蓮華文鬼瓦の一群である。珠文を巡らした蓮華文を中央に大きく一つ配置し（単数蓮華文）、周囲の余白に細い凸線を格子状に配する。奥山Ⅰ式鬼瓦には軒丸瓦Ⅲ型式と同じ蓮華文がデザインされ、鬼瓦と軒丸瓦の間で文様の統一性を意識していたことがうかがえる。鬼瓦の外形はいずれも四周が直線的で、外形は角張っている。こうした外形・文様は中国や朝鮮半島にも類を見ず、百済スタイルから距離を置き、日本独自の鬼瓦製作が開始されたことを示している。製作技法も若草伽藍とのつながりは薄く、笵づくりの初現である。笵は用いるものの、のちに一般的となる粘土を笵に詰め込む方法ではなく、粘土板に笵を打ち込むことによって文様を表出していると考えられる。文様の

凹凸は小さく全体的に平板で、厚さは２cm 前後と非常に薄手であることも特徴である。薄手であるためか焼きひずみが比較的大きい個体が散見する。やや縦型のものと横型の２種類があり、下端を縦型は１型、横型は下端両側を抉る２型としてつくる[1]。棟の高さを表す本体高を踏まえると前者は大棟用、後者は平芯の降棟専用として製作されたものであろう。生産遺跡としては、奥山廃寺へ瓦を供給していたことが知られる五條市天神山瓦窯で奥山Ⅰ式の破片が表採されているほか（近江 1977）、岡山県末奥瓦窯から搬入されていることが確認されている（伊藤・松本 2000）。

７世紀半ばになり、643 年ごろに金堂が完成する山田寺では２種の蓮華文鬼瓦（山田寺Ａ種・Ｂ種）が製作されている（奈良文化財研究所 2002）（第４図）。単数蓮華文という前代の流れを汲みつつも、大型化し厚手のものになる。その製作技法はＡ種がいわゆる笵づくりで、全体を覆う１枚の木製笵型と枷型とを用いている。固定装置は特に設けない。同文様ながらＡ種よりやや小さく作られるＢ種は、Ａ種とそれほど隔たらない時期に製作されたと考えられているが、単数蓮華文は手彫りで表出する。手彫りという面では法隆寺の若草伽藍と共通するが、直接的な系譜とは考えにくい。このＡ・Ｂ種ともに下辺は２型であり、降棟専用鬼瓦として製作されている。本体高約 23.3cm から復元できる熨斗積高は約 20cm。

奈良時代後半にも、単数蓮華文鬼瓦の伝統は引き継がれていく。その代表が奥山廃寺出土の奥山Ⅱ式鬼瓦（第７図）である。周囲に珠文を巡らした重弁蓮華文を中央に大きく置くデザインはⅠ式と変わらないが、周囲の格子目文様は表されず、凸線は区画として配されて、植物文が蓮華文の両下脇に配される。外形は全体的に横長で、奥山Ⅰ式に比べると小型である。上辺は弧状にカーブし、下辺は３型で隅棟用。本体高は 22.6cm でそこから復元できる熨斗積高は約 18cm である。この奥山Ⅱ式の笵を彫り直し、珠文帯部分を鋸歯文に改造した鬼瓦が山村廃寺で出土する（第８図）。下辺はやはり３型で、隅棟専用品として製作されたことがわかる。

また一方で、天武朝に造営された山田寺では宝蔵用の平瓦を転用して作った鬼瓦が出土している（第５図）。風食がみられ、平瓦として一定期間使われたものがのちに打ち欠きによって鬼瓦に成形されたもの。下辺は１型、鳥衾瓦[2]の固定のために上辺中央に凸部を作り出しているのが興味深い。

ii　宮都の様相

藤原宮以前の諸宮では瓦葺が採られていない。宮都として最初に瓦葺を採用した藤原宮では、鬼瓦は重弧文のもの（第９図）がわずかに出土するだけである。縦型長方形の板状粘土を準備し、表面にフリーハンドで逆Ｕ字状に数条の溝を掘り込み、重弧文を表現する。固定装置は縦位の貼り付け把手。蓮華が一般的に軒丸瓦の文様として採用され、藤原宮の軒丸瓦も同様の様相を示す一方で、鬼瓦や隅木蓋瓦には蓮華文を採用せず、敢えて重弧文

軒平瓦に共通する文様を採用したといえる[3]。いずれにせよ、「軒瓦の文様と鬼瓦文様の統一を図る」意識は飛鳥時代の特徴ともいえるだろう。

また、軒瓦の出土量に比べ鬼瓦の出土が非常に少ないことは、山田寺から既に平瓦を転用した無文鬼瓦が出土していることも参考にすれば、無文や平瓦の転用などのために我々が抽出し難い形態の鬼瓦が使用されていた可能性も考えるべきである。

ⅲ　小結

この時代の鬼瓦についてまとめよう。初現期は百済の影響を色濃く受けていたが、すぐに日本独自の鬼瓦を作り出す。すなわち、前者は法隆寺出土の複数蓮華文、後者は単数蓮華文の薄い板状の鬼瓦がそれである。棟の形を意識しないまま製作している様子もうかがえるが、降棟専用の鬼瓦の製作も行われており、建築される屋根の形態に合わせた鬼瓦生産が始まっていることを示す。

７世紀半ば以降には笵詰めによる鬼瓦生産が始まる。厚みが増し、一定の品質を保った鬼瓦が生産されていたと考えられる。また、７世紀を通じて、鬼瓦は角ばった形態をとり、文様は軒瓦のものに合わせようとする意図があったことがわかる。

どのように屋根に葺かれていたのかは、出土品から判断するのはなかなかに困難であるが、７世紀の鬼瓦の場合は、下辺の抉りの形態を変え、棟に対応させることが比較的多く行われている。２型や３型が多いため、その鬼瓦が降棟専用品・隅棟専用品として製作されていたことを示す。また、両側辺が直線的でほぼ垂直に立ち上がり、上辺については７世紀前半期の資料は直線的に水平をなし、７世紀半ば以降のものは緩い弧状を呈する。鬼瓦が棟端を塞ぐためのものという本来の意義を踏まえれば、鬼瓦の外形は鬼瓦が塞ぐ棟断面をある程度反映していると考えられ、さらに棟の構築方法を復元する材料となりうると考えられる。資料は少ないながらも、ここまで見てきた７世紀の鬼瓦の外形を見ると、熨斗瓦は垂直を志向して積み上げ、最後に平瓦を伏せて最上部を覆っていたことを示唆している[4]（第６・11図）。

C　奈良時代の鬼瓦

平城京への遷都は古代の鬼瓦にとって大きな画期として認識できる。奈良時代の幕開けともなる平城京の遷都。その国家的造営事業にあたって作笵された鬼瓦は鬼神の全身を表す鬼身文鬼瓦であった。文様的には前代からの伝統とは全く異質であるだけではなく、外形はそれまでの角形からアーチ形に変化した。この外形の変化については、棟の積み方などに変化があったことを示唆する。

その後も、平城宮内では基本的には鬼身文／鬼面文鬼瓦が使用され続けた。素文縁を持ち、巻き毛を強調した神獣の姿や顔を模した一群の鬼瓦は平城宮式鬼瓦と呼称されている。

平城宮造営では様々な規模、屋根形態に合わせた鬼瓦を大量にかつ迅速に生産しなければならない局面に直面し、製作は笵づくりで統一される。また、一つの笵から棟にあわせて大きさを調整するさまざまな工夫が図られた。また奈良時代前半には平城京内の寺院には平城宮式鬼瓦が供給されていたようだが、奈良時代半ば以降には寺院専用のデザインの鬼瓦が製作されるようになり、平城宮と寺院の間で鬼瓦の使い分けが行われるようになる（岩戸 2001）。

以下、型式ごとに概観する。

ⅰ　平城宮式の鬼面文鬼瓦

平城宮ではこれまでに確認された鬼身文・鬼面文鬼瓦[5]は 393 点を数える。以下、平城宮瓦編年の時期ごとに作笵時期を分けて概観する。

①平城宮瓦編年Ⅰ期

平城宮Ⅰ式　舌を出した鬼神が蹲踞する図像のⅠ式は毛利光編年で大型のＡとやや小型のＢ1、Ｂ2 に細分されている（第 12～14 図）。外形に沿って素文縁を巡らし、鬼神の周りを唐草状の巻き毛で埋める。Ａは笵が抜けやすくするためか、外縁と巻き毛には傾斜をつけ、文様自体の凹凸も比較的小さく作る。側面はすべて調整を加え、笵や枷型の痕跡は見えないが、厚さが５～６cm と厚い一群と、３cm 程度の薄い一群があり、笵構造の違いによるものと考えられる。Ｂ1 やＢ2 は文様の出が平坦で、傾斜というよりは段差を付けることで凹凸を表現している。今回、薬師寺で出土していたＢに属す資料を新たに型式設定し、Ｂ3 とする（第 15 図）。基本的に固定方法は釘孔。

宮内においてＡは 140 点、Ｂ1 は 41 点出土し、Ｂ2 は４点のみ出土。Ｂ3 は宮内では出土しない。Ａは平城宮で出土した鬼瓦出土数の 1/ 4 を占める。出土地については中川二美氏の研究（中川 2016）に詳しいが、宮内の中枢域にもまた周辺域でも出土している。以前は建物や棟の大きさによってＡとＢを使い分けていると考えられてきたが、３種類のＢはいずれもＡの図像を理解しないまま作笵しており、セットで製作されたとは考えにくい。Ｂ1・Ｂ2 はその大部分が東方官術付近で集中的に出土しており、Ａを参考に役所の鬼瓦として作笵されたものであろう。その出土状況を見る限り、一つの建物の中で棟の大きさによって使い分けたというよりも、エリアによる使い分け、つまりは建物の性格によって使い分けていた可能性が高い。

Ⅰ式Ａは中山瓦窯で焼成されていたことが判明しているが（今井 2015）、Ｂ1・Ｂ2 に関しては生産遺跡での出土はなく詳細不明。京内寺院では薬師寺や興福寺、法華寺、海龍王寺など奈良時代前期に造営が行われた寺の多くでⅠ式Ａが出土している。造宮組織から供給を受けていたと考えられている。京内での出土は多くないが、左京二条二坊五坪の藤原麻呂邸や左京三条二坊の長屋王邸などでも出土している。

②平城宮瓦編年Ⅱ期

平城宮Ⅱ式　Ａ1とＢ1、Ａ2とＢ2で大小のセットで製作された（第16～18図）。舌出しの鬼面をやや小さく表現し、顔周囲の余白は巻き毛が充填される。固定方法は基本的に釘孔。Ａ1とＢ1はそれぞれ40点以上が出土し、Ａ1は東方・西方関わらず宮内全域の官衙域で分布する。Ａ2はいずれも東方官衙や兵部省、壬生門に集中して出土する。Ｂ2は東方官衙で1点出土したのみ。Ａ2は側面を調整せず、文様型と枷型の境い目が観察できる個体が散見する。宮外ではＡ2やＢ1を中心に海龍王寺、西大寺、唐招提寺で出土。Ａ1・Ｂ2は山稜瓦窯・押熊瓦窯で生産されている。

③平城宮瓦編年Ⅲ期

平城宮Ⅲ式（第21図）　山猫を思わせる顔付きの鬼面文。舌が省略され、巻き毛も簡略化し、文様の凹凸は小さく、平板。全長が幅を大きく上回る縦長のプロポーションを取ることが特徴的。Ⅰ期・Ⅱ期の鬼瓦のうち小型品であるⅡ式Ｂ1を除き、下端幅は全て40cmを超えるが、本品は約30cm。

宮内では27点が出土。東方官衙や東院での出土が多いが、第二次大極殿・朝堂院での出土もある。中山瓦窯で1点出土し、中山瓦窯生産品である可能性が高い。宮外では菅原遺跡で同文様の小型瓦が13点、６個体以上が出土している（菅原遺跡調査会 1983）ほか、興福寺、新薬師寺、白毫寺、法隆寺、左京二条二坊・三条二坊（藤原麻呂邸・長屋王邸）、右京二条三坊で出土。

平城宮Ⅳ式（第19・20図）獅子を思わせる顔を文様面に大きく表す大型の鬼面文鬼瓦。顔の周りには巻の強い巻き毛を配する。Ａは宮内で最大の鬼瓦で幅48.6cm、全高は43.6cm。同文様でやや小ぶりのＢもある。Ａは43点、Ｂは８点出土した。宮内の出土は第二次大極殿や東区朝堂院など奈良時代後半の宮中枢域に多く出土し、平城還都後の平城宮整備に伴い作笵された型式と考えられている。宮外では法隆寺・興福寺で出土する。伝中山瓦窯出土のＡが1点あり、中山瓦窯産か。

平城宮Ⅴ式（第22・23図）　巻き毛が簡略化された小型の鬼面文鬼瓦。外縁が脚下端まで巡り、鬼瓦全長を延長することは意識されておらず、実際に短縮したものしか出土していない。同文の大小２種Ａ・Ｂがある。Ａは宮内で９点出土し、東院地区や式部省で多く出土する。Ｂは宮内で５点出土し、いずれも東院と東方官衙で出土。京内では藤原麻呂邸、阿弥陀谷廃寺・西大寺でＢが出土。Ａが押熊瓦窯で出土しており、生産瓦窯と考えられる。

④平城宮瓦編年Ⅳ期

平城宮Ⅵ式（第24図）　省略化が一段と進んだ鬼面文鬼瓦。口の両脇は巻き毛を現すが、額や頬上部は獣毛が直線的にあらわされる。全長と全幅がほぼ等しく、Ⅲ期の鬼瓦とはプロポーションを異にする。大小のＡ・Ｂがあるが、Ｂは小片のため全形は不明。Ａは第二次朝堂院地区と東院地区、Ｂは東方官衙で出土が多い。

ii　吉祥文鬼瓦

平城宮・京で用いられた鬼瓦は鬼面文が圧倒的多数を占めるが、その一方で７世紀に盛行した蓮華文とも異なった植物文や鳳凰文など吉祥文様をモチーフにした鬼瓦が複数型式存在する。また少数ながら無文の鬼瓦も確認されている。軒丸瓦の型式を援用できる蓮華文鬼瓦以外の型式についての製作時期は判然としない。

蓮華文鬼瓦　宮内出土唯一の蓮華文鬼瓦である（第 25 図）。破片であるが、文様面中央に蓮華文を置き、抉りに沿って珠文帯と外縁が巡ることがわかる。下辺中央に抉りがあるが１式か３式かは不明。下方の蓮弁は抉りの形に沿うように他よりも短く表現される。固定方法は不明。破片で詳細不明ながら、全高 20cm ほどの小型品と想定される。東方官衙を流れる基幹排水路 SD 2700 から出土した。蓮華文が 6133 型式であることから、平城瓦編年Ⅱ期、すなわち８世紀第２四半期の所産。

唐花文鬼瓦　宮内では東方官衙域で集中して出土し、４個体以上が確認されている。焼成が軟質で摩滅した破片が多いが、2020 年度に実施した３次元計測をもとに、製作当初の姿を復元し（第 26 図）、さらにレプリカを作成して報告した（岩戸 2021）。文様内区中央に５弁の花文を置き、周囲を細い蔓茎が囲み、葉が派生する。花や蔓・葉はやや稚拙な表現ながら、外形に沿って巡らせた小粒の珠文帯や、左右下端から上方に向かって展開する唐草文は繊細な表現ともいえる。固定装置はなし。中央に大きな花文を置き、周りに蔓草を配するデザインは唐花文にも通じ、以前は唐草文と呼ばれていたが、報告時に「唐花文」と改めた。中国の唐や大宰府には塼として、同じ構成のデザインが見られる。

なお、京内から出土した唐花文鬼瓦として、宮内出土のものとは別笵の大型品（右京八条一坊十一坪、左京八条二坊四坪出土）（第 27 図）がある。下辺は３型で隅棟専用。中央に唐花文、四隅に飛雲文を配し、その外区には流麗な唐草文と外縁を巡らす。先述の宮内のものよりも文様的な完成度は高い。

宝相華文鬼瓦（第 28 図）　全長が 18cm ほどの小型品。摩滅しているが、中央に対葉花文が見え全体は宝相華文様を志向したものと推定される。外縁に沿って珠文帯が巡る。本体長は約 10cm と非常に低い棟に対応することがわかる。東院地区で１点出土。

鳳凰文鬼瓦（第 29 図）　平城宮式鬼瓦と同形の傾斜縁を備え、文様面いっぱいに右方を向く鳳凰を表す。鳳凰の周囲には唐草文を配する。抉りは浅い横長半円形を呈している。平城宮Ⅲ式やⅤ式同様、縦長のプロポーションを取る。東方官衙から集中して出土する。

iii　南都七大寺式の鬼瓦

奈良時代半ばに平城宮式とは異なる系統の鬼瓦が登場する。平城宮式に比べ巻き毛の表現の割合が少なく顔面の比率が大きい。また、珠文帯を巡らせ、どんぐり眼を特徴とする。平城宮式には必ず備わる外縁を持たない型式も多い。

①奈良時代前半期

興福寺では奈良時代前期にさかのぼる平城宮式と南都七大寺式の両方の特徴を備えた鬼瓦（第31・32図）が出土しており（藪中 1997）、平城宮式を基に派生したデザインを取り入れつつ、独自のデザインを模索していた過渡期のものと考えられている。奈良時代半ば以降、こうした動きを踏まえて南都七大寺式が本格的に製作開始されていったものと考えられる。

②平城瓦編年Ⅲ期

南都七大寺０式　今回、『天平地寶』に掲載されながら行方が知られていなかった大型の南都七大寺式鬼瓦を紹介する（第33図）。これまで大型とされていた南都七大寺Ⅰ式Ａよりもさらに大きく、東大寺所用として作笵されたと思われるが、額に鋸歯文の有無が確認できないため、Ⅰ式ではなく０式としておく。耳の形態がかなり古式であること、口の脇にある巻き毛は平城宮式にも共通する蕨手状であることから、奈良時代前期の興福寺出土例と南都七大寺Ⅰ式の間に位置づけたい。牙には赤色顔料が塗布されている。

南都七大寺Ⅰ式（第34～36・38図）　毛利光氏が当初Ａ、Ｂ1、Ｂ2と３種に分類していたが（毛利光 1980）、のちにさらに同笵照合を進め、Ｂ3、Ｂ4（図38）が追加設定された（毛利光 2002）[6]。Ａは昔から知られていた資料が鬼面上部の破片しかなかったため全体が不明だったが、近年の調査で出土した資料をあわせて合成復原することができた（第34図）[7]。口の両脇のひげを額と同じ線鋸歯文で表すこと、その鋸歯文がわずかに内湾すること、牙や歯上面に弱い凹線を入れるのが特徴である。おおよその復元値で全長55cm。幅47cmと巨大なものになる。食堂北方付近出土資料は東大寺創建期の遺構から出土しており、ＩＡも創建東大寺に伴うもので間違いないだろう。Ｂ1（第35図）は東大寺、西大寺、唐招提寺で出土。Ｂ2（第36図）は大安寺でのみ出土するので大安寺所用と考えられる。Ｂ1は荒池瓦窯で出土しており、ここで焼成されたものか。

南都七大寺Ⅱ式（第37図）　法隆寺専用の小型の鬼瓦。額に小さく鋸歯文を置き、鬼面周囲に珠文を置く南都七大寺式の鬼面文であるが、目以外は凹凸が少なく全体に平板な印象を受ける。口や顎ひげの下方に大きく無文帯を設け、特に口下方の無文部分には凸線の山形文様を置く。Ⅰ式やⅢ式ではこの無文帯を切り落とすことで一回り小さい鬼瓦を作り分けていた（「縮小技法」）が、Ⅱ式では行われておらず、無文帯の製作上の意味を知らないまま作笵した可能性が高い。

南都七大寺Ⅳ式（第39・40図）　額の鋸歯文も耳、ひげも省略されたシンプルな型式。三角形の眉と環状に周囲をくぼませた珠文帯を巡らせる。Ａは外縁を備えた中型の鬼瓦で、大きさの調整は行わない。Ｂは外縁を持たず、Ａより一回り小さい。Ａは内裏北外郭で緑釉がかかったものが出土した。平城宮内で出土した唯一の南都七大寺式である。Ｂ1は大安寺で集中して出土するが、Ａは平城宮のほか、新薬師寺、西大寺、大安寺、額安寺、Ｂは大安寺、法隆寺、興福寺、尼寺廃寺、片岡王寺など広い範囲に分布が見られる。Ｂ2も

あるが、出土点数が少なく詳細不明。Ｂ１が荒池瓦窯から出土しており、生産窯か。

③平城瓦編年Ⅳ期

南都七大寺Ⅲ式（第 41 図） 額の鋸歯文は省略されるが口の両脇に唐草状の巻き毛を表現する。唐招提寺、薬師寺、西大寺といった西ノ京の寺院で共有された型式。外縁が巡るが、第 41 図左の唐招提寺の資料では抉り部分及び頂部の無文帯を切り残し、復元長 55cm の大型品を作り出している。この資料から、笵の外縁部には立ち上がりがなく、頂部方面には必要なだけ無文部を作り足すことができた可能性が高い。

南都七大寺Ⅴ式（第 42 図）

中型と小型の２種がセットのデザインで作笵されたⅤ式は、額の鋸歯文やしわ、顎ひげなどは省略され、鬼面と珠文のみを表現する。デザインの省略化から奈良時代後半のものと考えられている。Ⅴ式Ｂは出土が少ないものの、荒池瓦窯からＡが興福寺からＡ・Ｂで出土しており、興福寺の造瓦組織で制作されたことが想定されている。大安寺や法華寺といった寺院のほか、平城京左京二条～三条でも出土を見る。特に、左京二条二坊十五坪ではⅤ式Ａの三彩鬼瓦が出土していることは特筆される。

ⅳ　無文鬼瓦（第 30 図）

山田寺で出土した無文鬼瓦は平瓦の転用であったが、奈良時代の無文鬼瓦は、粘土を板状に整形し、周囲を切り取って、アーチ形の鬼瓦を成形している。平城宮内では壬生門や兵部省で出土しており、大安寺、尼寺廃寺、毛原廃寺でも出土している。

ⅴ　小結

奈良時代は、平城宮造営にあたって初めての鬼瓦の大量生産という局面に直面し、様々な試行錯誤が行われながら鬼瓦の生産が行われていた。奈良時代前半は平城宮式Ⅰ式Ａに特化して鬼瓦を一括生産し、平城宮全体さらに京内寺院にも供給を行っていた。

造営にひと段落ついた平城瓦編年Ⅱ期には官衙用や小型建物用の鬼瓦など特別の目的を持った鬼瓦が作笵され、平城宮式鬼瓦にバリエーションが現れる。奈良時代後半になると、大型の鬼瓦や幅が狭く縦長の鬼面文鬼瓦が追加されていく。また、製作時期ははっきりわからないものの、吉祥文様を飾る小型の鬼瓦も平城宮では使われていた。平城宮式の鬼面文鬼瓦には珠文を伴わない点が大きな特徴のひとつであったが、平城宮で出土する吉祥文鬼瓦には基本的に珠文が伴う。また外周だけでなく、抉り部や脚下端にまで珠文隊が巡るのはこの一群にだけ見られる特徴であり、同じ大きさの小型鬼瓦を量産する意図か、造宮組織で行われていたような細かな鬼瓦の作り分けを行わない別系統の工人によるものなのかもしれない。また一方で、鬼面文以外の文様で大型の鬼瓦が作られていないことは、平城宮の格式がある建物や主だった官衙では鬼面文で統一するという意思があったとも推測できる。小さな建物や築地塀などに鬼面文以外の小型鬼瓦が補足的に使用されたのではな

かったか。

棟積みでいうと、7世紀はほぼ垂直に熨斗瓦を積んでいたが、8世紀前半の平城宮Ⅰ式Aは内傾するように熨斗瓦を積む形に変化したと考えられる（第11図）。しかしながら、極端に内傾するのはⅠ式Aのみで、時代が下ると内傾度は少なくなっていく。

一方で、南都諸寺では奈良時代前半期は平城宮式鬼瓦の供給を受けており、奈良時代半ばになって南都七大寺式を創出する。棟にあわせてサイズ変更がより自由な構造が好まれたのか、奈良時代以降も長岡宮や平安宮にまでこの南都七大寺式が引き継がれていくこととなる。平城宮式と異なるのは、東大寺や興福寺、大安寺は特定の鬼瓦を選択的に使用していた可能性があることである。またそれ以外の寺院では複数の寺で鬼瓦の型式を共有する傾向にあることである。そして、出土数が限られているので推測の域を出ないが、南都七大寺式が登場した後も平城宮Ⅲ式・Ⅴ式などの縦長タイプの鬼瓦に関しては供給が続いているように見受けられる。

D　平安時代の鬼瓦

ⅰ　平城宮の様相

遷都後の平城宮でも平安時代前期の平城上皇の時期までは整備が行われており、平安時代初期の遺物が出土する。平安時代の鬼瓦としては東三坊大路側溝で平安時代の土器を共伴して出土した鬼面文鬼瓦がある（第43図）。下顎を持つ鬼面文の平城宮式Ⅱ式をモチーフに作笵されたと考えられ、両側辺のみだが凸線を二重に作る点はⅡ式B1を参考にしてデザインした可能性が高い。平城宮式の流れをくむものとして、平城宮Ⅶ式と設定したい[8]。

ⅱ　寺院の様相

散発的に出土を見る。山田寺や興福寺（第44図）、薬師寺、西隆寺、秋篠寺などで平安時代とみられる鬼瓦が出土している。いずれも笵づくりによるもので、珠文帯を巡らし、下顎を省略した鬼面を大きく表す南都七大寺式の系統をひくものである。出土数は多くない。山田寺や西隆寺では鬼面の外側に珠文ではなく勾玉形を巡らすものもある（第45・46図）。また、山田寺出土例は頂部と脚下端に無文部が切り残され、奈良時代同様に無文帯を利用して、鬼瓦の大きさを調整する「延長」の技法が受け継がれていることがわかる。

大安寺西塔では、南都七大寺Ⅰ式B2ながら、鬼瓦上端部の笵が著しく痛んだ状態で作られた製品が出土し、平安時代の補修瓦として認識されている（第47図）。鬼瓦は軒瓦に比べて必要となる製品数が少なく、鬼瓦笵はより長期間使用されていたことを示す好例であろう。

時代が下るにつれて鬼面文の巻き毛や顎ひげは省略され、目鼻に加え眉毛を強調したデ

ザインが目立つなど大雑把な表現になっていく。従来鎌倉時代とされていた興福寺出土鬼面文鬼瓦（図 48）は笵づくりによるものであり、平安時代の所産と考える。この資料では、南都七大寺式鬼瓦で長い間固守されてきた下牙までもが省略され、不整形な口端はだらしない印象を与える。現役最古の鬼瓦である法隆寺夢殿所用鬼瓦（図 49）は平安時代末期の鬼瓦とされ、最後の笵づくりによるものとされている（小林 1981）。

ⅲ　小結

平安時代になると鬼瓦の鬼面はそのしわや髭などが積極的に省略されていった。鬼面表現が単純化したことが、鎌倉時代に鬼瓦製作が手づくねに一気に変換していく素地となった可能性もあるように考える。

手づくねの鬼瓦が作られるうち、額には角が生え、表情も恐ろしい地獄の鬼や般若的な表情のいわゆる「鬼瓦」に転換し、古代以来の神獣を表現した鬼面文鬼瓦の伝統は終焉を迎えることとなったのである。

（奈良文化財研究所）

註

1　鬼瓦の下辺に抉りを作らないものを０型、下辺中央に１つ半円形抉りを設けるものを１型、下辺両端の２ヶ所に抉りを設けるものを２型、下辺両端及び中央の３ヶ所に抉りを設けるものを３型と分類する。理論上、０型の鬼瓦は降棟と隅棟に、２型は降棟のみ、３型は隅棟のみ対応でき、１型はどの棟にも対応できる。詳しくは（岩戸 2005）を参照。

2　この時代にはまだ鬼瓦の固定に特化した鳥衾瓦は登場していない。代わりに軒丸瓦を用いたと考えられるが、鬼瓦固定用という意味で鳥衾瓦の語を使用する。

3　ただし、同様の重弧文鬼瓦は藤原宮以外でも小山廃寺（第 10 図）や法隆寺、さらに愛知県勝川廃寺でも出土している。

4　山田寺の倒壊東回廊では大棟の棟積みが復原されている（第６図）、斗栱積みの頂部に平瓦を伏せ、さらにその上に丸瓦を置く（近現代では雁振瓦）。棟端では鬼瓦を軒丸瓦でおさえるが、反りのない軒丸瓦では、軒丸瓦の瓦当が鬼瓦の文様を隠してしまうことになるため、平瓦で上から押さえた上から軒丸瓦をさらに乗せていたと考えられている。

5　以降、鬼身文も鬼面文に含めて議論する。

6　上部片は伝東大寺南大門出土資料（帝室博物館 1937）、左上は伝興福寺資料（大阪狭山博物館 2017）、左下は東大寺食堂北方付近出土（奈良国立博物 2002）、右は由義寺出土資料（八尾市立歴史民俗資料 2019）、右下は東大寺食堂北方付近出土資料を反転復元。

7　B３は山城国分寺出土品なので今回は割愛する。

8　平城宮 VII 式は毛利光 1991 で既に設定されているが、今回実見したところ鳳凰文の一部であることが判明したため、本資料を新たに VII 式と設定する。

主要　参考文献

伊藤　晃・松本和男 2000「吉備最古の軒丸瓦と鬼瓦」『古代瓦研究１－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所

今井晃樹 2015「中山瓦窯の調査－第 523 次」『奈文研紀要 2015』奈良文化財研究所

岩戸晶子 2001「奈良時代の鬼面文鬼瓦－瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷」『史林』第

84 巻３号　史学研究会
岩戸晶子 2005「技術的観点からみる統一新羅の鬼面文鬼瓦－その抉りに注目して」『MUSEUM』（特集：朝鮮の古瓦）No. 596　東京国立博物館
岩戸晶子 2021「３次元モデルを活用した平城宮出土唐花文鬼瓦の復元」『奈良文化財研究所紀要 2021』奈良文化財研究所
近江昌司 1977「五條市天神山瓦窯の遺跡と遺物」『國學院雑誌』78-9（大場磐雄博士追悼考古学特集号）　國學院大學
大阪狭山博物館 2017『蓮華の花咲く風景－仏教伝来期の河内と大和－』（大阪府立狭山池博物館図録 20　平成 29 年度特別展）
菅原遺跡調査会 1983「菅原遺跡の小型瓦」『古代研究』25・26（特集・小型瓦）
帝室博物館 1937『天平地寶』
中川二美 2016「鬼瓦の分布から見た平城宮の造営－第一次大極殿院の復原研究 20」『奈良文化財研究所紀要 2016』奈良文化財研究所
奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』（奈良文化財研究所学報第 63 冊）
毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－八世紀を中心にして」『研究論集』Ⅵ　奈良文化財研究所
毛利光俊彦 1991「第Ⅳ章　遺物　１瓦縛類　Ｄ道具瓦と磚」『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』　奈良文化財研究所
八尾市立歴史民俗資料館 2019『由義寺 発見－国史跡指定記念－』　明新社
藪中五百樹 1997「興福寺式軒丸瓦と鬼瓦製作技法の研究」『立命館大学考古学論集』Ⅰ　立命館大学
山本忠尚 1998『鬼瓦』（日本の美術 12　No. 391）　至文堂

図版出典

第１図：奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞　護る・祓う・鬼瓦の世界』 p. ６－６。
第２図：山本（1998） p. ２　第３図。
第３図：奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞　護る・祓う・鬼瓦の世界』p. ６－７。
第４図：奈良文化財研究所（2002） Ph. 204 －１・２。
第５図：奈良文化財研究所（2002） Ph. 191 －１。
第６図：奈良文化財研究所（2002） Ph. 188 －２。
第７図：山本（1998） p. ３　第６図。
第８図：山本（1998） p. ３　第７図。
第９図：奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞　護る・祓う・鬼瓦の世界』 p. ６－８・９。
第 10 図：山本（1998） p. 30　第 57 図。
第 11 図：筆者作成。
第 12 図：岩戸（2001） p. 12　第８図－１。
第 13 図：岩戸（2001） p. 12　第８図－２。
第 14 図：山本（1998） p. 22　第 44 図。
第 15 図：筆者撮影。
第 16 図：岩戸（2001） p. 12　第８図－３。
第 17 図：岩戸（2001） p, 12　第８図－５。
第 18 図：岩戸（2001） p. 12　第８図－４。
第 19 図：岩戸（2001） p. 12　第８図－６。
第 20 図：岩戸（2001） p. 12　第８図－７。
第 21 図：岩戸（2001） p. 16　第 11 図－１。
第 22 図：岩戸（2001） p. 16　第 11 図－４。
第 23 図：岩戸（2001） p. 16　第 11 図－５。
第 24 図：山本（1998） p. 25　第 51 図。

第 25 図：筆者撮影。
第 26 図：奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2021』p. 195　図 251。
第 27 図：山本（1998）p. 31　第 59 図。
第 28 図：奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞　護る・祓う・鬼瓦の世界』p. 11 － 22。
第 29 図：奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞　護る・祓う・鬼瓦の世界』p. 10 － 21。
第 30 図：奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞　護る・祓う・鬼瓦の世界』p. 11 － 23。
第 31 図：山本（1998）p. 27　第 52 図。
第 32 図：奈良大和路～悠～遊＜ http://pinbokejun.blog 93.fc 2.com/ ＞。
第 33 図：帝室博物館（1937）図版 109 － 32。
第 34 図上：帝室博物館（1937）図版 110 － 40。左上：狭山池（2017）p. 58 － 75。左下：奈良国立博物館 2002『大仏開眼 1250 年　東大寺のすべて』p. 302 － 218(3)。右上：八尾市教育員会 2018『大阪府八尾市所在　由義寺跡－塔基壇の調査－』図版 21 － 110。右下：奈良国立博物館（2002）p. 302 － 218(3)。これらを筆者が合成・復元（反転復元を含む）。
第 35 図：帝室博物館（1937）図版 109 － 34。
第 36 図：帝室博物館（1937）図版 109 － 38。
第 37 図奈良文化財研究所 2021『奈良文化財研究所紀要 2021』p. 21　図 24 － 6 。
第 38 図左：奈良文化財研究所（2002）Ph. 205 － 1 。右：帝室博物館（1937）110 － 39。
第 39 図：岩戸（2001）p. 21 第 12 図－ 10。断面図：奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ』PL. 54 下。
第 40 図：奈良国立博物館 1993『奈良国立博物館蔵品図版目録　考古篇　仏教考古』p. 89 － 2 を一部改変。
第 41 図：岩戸（2001）p. 21 第 12 図－ 8 ・ 9 。
第 42 図：帝室博物館（1937）図版 111 － 45。
第 43 図：奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ』PL. 54　上。
第 44 図：藪中五百樹 2000「奈良～平安時代の興福寺の新形式瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』帝塚山大学考古学研究所 p. 75 第 3 図。
第 45 図：奈良文化財研究所（2002）Ph. 205 － 5 。
第 46 図：奈良国立文化財研究所 1993『西隆寺発掘調査報告書』PL. 43 － 3 。
第 47 図：奈良市埋蔵文化財調査センター 2014『甦る大寺』 p. 5 － 12。
第 48 図：高浜市やきものの里かわら美術館・図書館ホームページ＜ https://www.takahama-kawara-museum.com/collection/ ＞。
第 49 図：山本（1998）を一部改変。



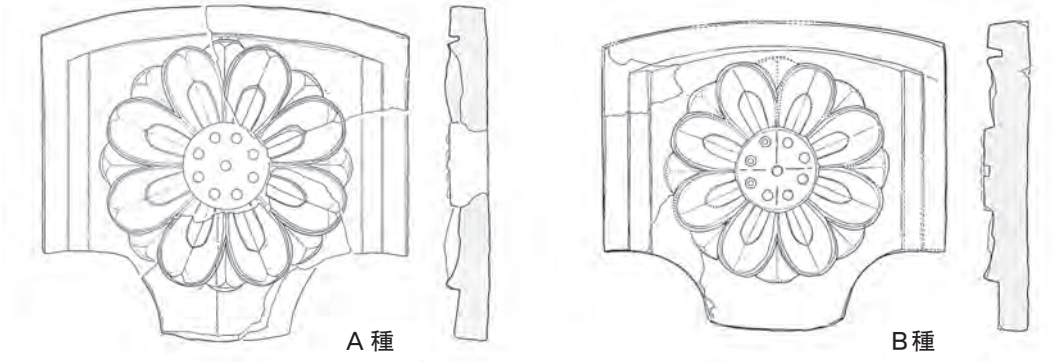
第１図　法隆寺若草伽藍出土
複数蓮華文鬼瓦（縮尺任意）



第２図　奥山廃寺出土 鬼瓦
（奥山Ⅰ式）



第３図　平吉遺跡出土 鬼瓦



第４図　山田寺出土 蓮華文鬼瓦



第５図　山田寺出土 無文鬼瓦



第６図　山田寺回廊 復元棟積



第７図　奥山廃寺出土
単数蓮華文鬼瓦（奥山Ⅱ式）



第８図　山村廃寺出土
単数 蓮華文鬼瓦

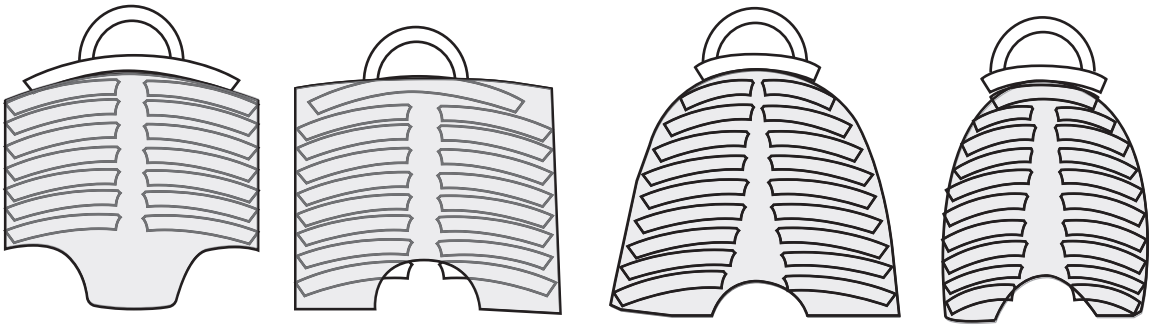
0　30cm



第９図　藤原宮出土 重弧文鬼瓦（表・裏）

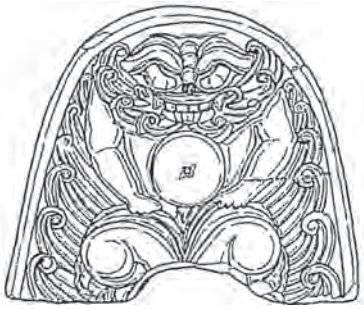


第 10 図　小山廃寺出土 鬼瓦

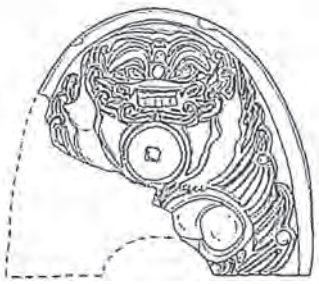


1　2　3　4

第 11 図　棟積模式図（１・２　７世紀：３・４　奈良時代）



第 12 図　平城宮Ⅰ式Ａ



第 13 図　平城宮Ⅰ式Ｂ１



第 14 図　平城宮Ⅰ式Ｂ2



第 15 図　平城宮Ⅰ式Ｂ3＊

（縮尺任意



第 16 図　平城宮Ⅱ式Ａ1



第 17 図　平城宮Ⅱ式Ａ2





第 18 図　平城宮Ⅱ式Ｂ1



第 19 図　平城宮Ⅳ式Ａ



第 20 図　平城宮Ⅳ式Ｂ



第 21 図　平城宮Ⅲ式



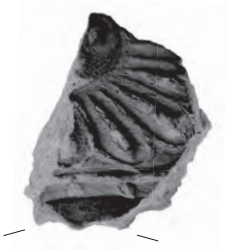
第 22 図　平城宮Ⅴ式Ａ



第 23 図　平城宮Ⅴ式Ｂ



第 24 図　平城宮Ⅵ式Ａ



第 25 図　蓮華文鬼瓦
（平城宮出土　縮尺任意）



第 26 図　唐花文鬼瓦



第 27 図　唐花文鬼瓦〔復元〕



第 28 図　宝相華文鬼瓦
（縮尺任意）



第 29 図　鳳凰文鬼瓦



第 30 図　無文鬼瓦





第 31 図　興福寺出土鬼面文鬼瓦
（縮尺任意）



第 32 図　興福寺再建中金堂隅棟の復元鬼瓦



第 33 図　南都七大寺 0 式＊
（伝東大寺）



第 34 図　南都七大寺Ⅰ式A1［復元］



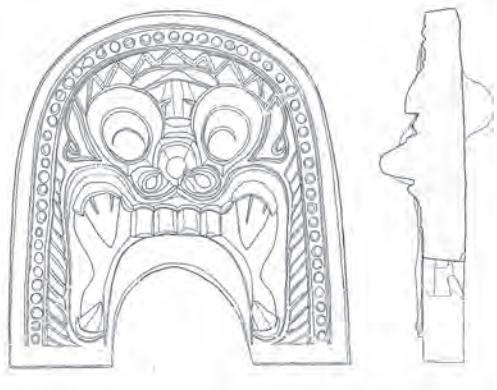
第 35 図　南都七大寺Ⅰ式B1
（東大寺西塔）



第 36 図　南都七大寺Ⅰ式B2
（伝大安寺）

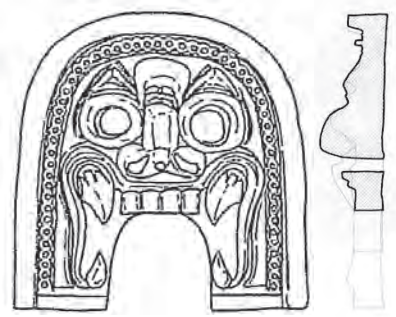


第 37 図　南都七大寺Ⅱ式［復元］
（法隆寺）



第 38 図　南都七大寺Ⅰ式Ｂ４（左：山田寺、右：東大寺講堂）　0　30cm

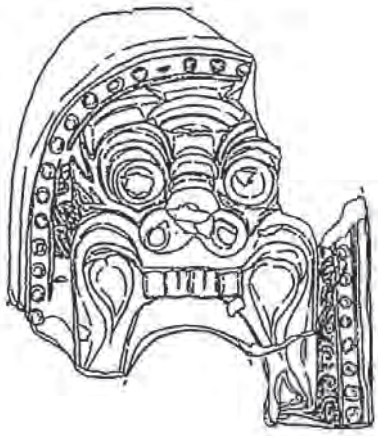
＊印は本稿で新たに設定された型式



第 39 図　南都七大寺Ⅳ式 A
（平城宮）



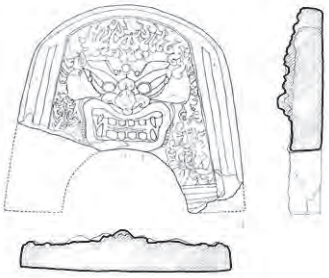
第 40 図　南都七大寺Ⅳ式Ｂ



第 41 図　南都七大寺Ⅲ式〔復元〕
（左片：唐招提寺　右片：薬師寺）



第 42 図　南都七大寺Ｖ式Ａ＊

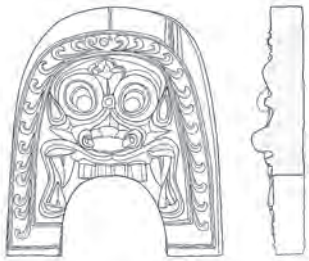


第 43 図　平城宮Ⅶ式＊

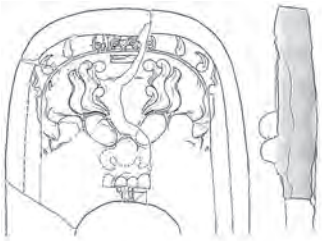




第 44 図　興福寺出土鬼面文鬼瓦



第 45 図　山田寺出土
鬼面文鬼瓦



第 46 図　西隆寺出土
鬼面文鬼瓦



第 47 図　大安寺出土鬼面文鬼瓦



第 48 図　興福寺出土鬼面文鬼瓦



第 49 図　法隆寺夢殿所用
鬼面文鬼瓦（縮尺任意）

＊印は本稿で新たに設定された型式